

通信制高校における生徒の実態分析

—大都市圏私立通信制高校調査研究を通して—

南本長穂（関西学院大学）
○尾場友和（関西学院大学大学院）

1. 研究の目的と問題の所在

本報告では、高校教育のメインストリームである全日制高校ではなくオルタナティブな高校、私立通信制高校に着目し、そこでの生徒の学校に対する捉え方やその営みについて明らかにすることを目的としている。

通信制高校の教育やシステムについては意外と知られていない。学習指導要領によると、いわゆる教師が対面して指導する（スクーリング）授業時間数は、教科にもよるが全日制高校のおよそ10分の1である。また学校行事も少なく、学校への関わり方の自由度も高いため、全日制高校で見られるような濃密な教師と生徒の人間関係や友人関係の構築などは難しく、通信制高校の中には大検単位、他校での修得単位（及び在籍年数）、学期ごとの単位認定などあらゆる手法で単位認定、累積を行うために、「高卒資格認定機関」（伊藤 1992）と揶揄される学校さえある。このように通信制高校は、それ自体だけでは制度的に社会性や人間性を高めることが難しいいうえに、「深い学習理解よりも高卒の資格のみを考える生徒」（石垣 2002, 255 頁）が多く在籍していることで学力面でも、他の高校とは一線を引かれる傾向がある。

しかし、高校教育がユニバーサル化し多様な生徒を受け入れていかなければならない現状を考えると、通信制高校では自学自習を基本としているため、個人のペースで教育を受けることが可能であり、他のオルタナティブスクールとは違い、通信制高校は一条校であるということからその公共性は増しているといえる。そこで本報告では、通信制高校の生徒が教師・学校、授業、友人にどのような関わり方をしているのかについて明らかにしていこうと考えた。

以上のような構想を思い立ったのには、高校中途退学の研究と昨今の高校教育改革の動きからである。高校中退については、

多様な生徒を受け入れていくようになった1980年代前後から教育問題として注目されるようになり、中退者の発生要因(秦 1981)や中退者の中学校生活、中退後の意識・就労状況(小林 1996)についての研究が盛んに行われた。

また、中央教育審議会答申『後期中等教育の拡充整備』（1966年）で示された「多様化政策」が、いわゆる「四六答申」を経て現実のものへと移行していき、90年頃から高校教育の普及にともなう多様な生徒に対応すべく、普通科、専門学科につぐ第3の学科としての総合学科や単位制高校、中・高一貫6年制の学校の新設がされていった。

しかし、多様な生徒を受け入れていくために「多様化政策」が行われたにもかかわらず、中退率の改善は見られず、オルタナティブスクールであるフリースクールやサポート校（補習塾）といった一条校でない学校が隆盛をみせるようになったのである。

（菊池・永田 2001）一方、既存の一条校でもオルタナティブスクールの成長と同じくして入学者を増やしている高校があった。それが通信制高校である。発足当初、勤労青年の受け入れを使命としていた通信制高校は、産業構造の変化等で先細っていたのだが、82年を境に増加傾向に転じ、全日制高校では通うことが難しくなった生徒を受け入れるようになっていったのである。

このように変貌を遂げた通信制高校は、オルタナティブスクールとは違い、一条校という正統性は確保されてはいるものの、高校教育のメインストリームから見れば距離があり、そこでの生徒や学校生活はメインストリームのそれとは異なったものであることが推測できる。

2. 調査の対象と方法・時期

(1) 調査対象

近畿圏に所在する私立通信制高校2校（A校・B校）に在籍し、調査当日回答した生

徒。

(2) 調査方法・時期

A校：平成16年3月の履修登録時に調査用紙を配布・回収した。有効回答者数は163名。

B校：平成16年6月の授業時間中に配布・回収した。有効回答者数は73名。

3. 主な調査項目

(1) 調査対象の高校生の概要

「年齢」、「性別」、「就業状況」、「中学3年生時の成績」、「中学3年生時の欠席状況」、「入学するまでの経緯」など。

(2) 入学の動機

「高卒の必要な場面があったから」、「高卒資格がないとやりたいことができないから」、「高校の勉強がしたかったから」、「厳しい校則がなく自由だから」、「学校行事が少なそうだから」など。

(3) 先生との関係

「自分から先生のところへ行くことが多い」、「卒業してからも付き合っていきたいと思える先生がいる」、「先生に注意されることがある」、「尊敬できる先生がいる」、「先生のことを信頼している」、「先生と話がしたくてわざわざ登校することがある」、「信頼してくれる先生がいる」、「親身になってくれる先生がいる」など。

(4) 友人との関係

「友達とうまくやっていく自信がある」、「学校の無い日よりもある日の方が楽しい」、「この学校の生徒は問題を抱えている生徒が多い」、「学校内の友達の数」、「学校外の友達の数」など。

(5) 授業

「スクーリング中は自分なりに真面目に取り組んでいるほうだ」、「スクーリング中はマンガを読んだりボーとすることがある」、「授業は半分以上理解できる」、「授業はやさしく感じる」、「レポート作成に苦労する」、「レポート作成に要する時間」など。

(6) 学業生活

「中学の時より家での勉強時間が増えた」、「高校生であるという自覚がある」、「科目を選ぶとき単位のとやすそうなものを選んだ」、「1つの学期が短いので自分の努力の成果がすぐわかり良い」、「今後の人生に自信がついた」、「入学したときより勉強が

楽しくなった」、「全日制高校の生徒に比べ人間的に成長している」、「この学校に来て良かったと思う」など。

4. 調査結果の報告

表1 年齢

		15-18歳	19-25歳	26歳以上	合計
所属	A校	87.7%	8.0%	4.3%	100.0%
	B校	56.9%	37.5%	5.6%	100.0%
合計		78.3%	17.0%	4.7%	100.0%

表2 性別

		男	女	合計
所属	A校	49.7%	50.3%	100.0%
	B校	52.8%	47.2%	100.0%
合計		50.6%	49.4%	100.0%

表3 就業状況

		正社員	契約社員	アルバイト	今は働いていない	就業体験なし	合計
所属	A校	2.0%	0.7%	47.7%	44.3%	2.0%	100.0%
	B校	8.6%	11.4%	45.7%	24.3%	2.9%	100.0%
合計		4.1%	4.1%	47.0%	37.9%	2.3%	100.0%

表4 入学するまでの経緯

		中卒	退学後すぐ	退学後就労	退学後無職	その他	合計
所属	A校	45.6%	28.1%	12.5%	8.8%	5.0%	100.0%
	B校	13.2%	39.7%	30.9%	11.8%	4.4%	100.0%
合計		36.0%	31.6%	18.0%	9.6%	4.8%	100.0%

5. 参考文献

伊藤靖幸 1992, 「大阪における高校教育改革」『大阪高法研ニュース』第120号。

石垣智博 2002, 『通信制高校の現状と今後の方向性』平成13年度静岡県教育委員会大学等研究機関派遣事業研修報告書。

秦政春 1981, 「高校中退者の発生要因に関する分析」『福岡教育大学紀要』第31号, 第4分冊 61-94頁。

小林剛 1996, 『子ども支援の臨床教育学』萌文社。

菊池英治・永田佳之 2001, 「オルタナティブな学び舎の社会学」『教育社会学研究』第68集, 65-84頁。

(詳細な分析結果等は当日配布いたします)